

# インドネシア、マレーシア、ブルネイ・ダルサラム 三カ国の言語分野協力 - 2007 年以降を中心に -

著者	舟田 京子
雑誌名	神田外語大学紀要
号	30
ページ	115-136
発行年	2018-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001475/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001475/</a>

# インドネシア、マレーシア、ブルネイ・ダルサラム 三カ国の言語分野協力 ー2007 年以降を中心にー

舟田 京子

## **Abstract**

The Majelis Bahasa Brunei Darussalam-Indonesia-Malaysia (MABBIM) was established as a regional language organization comprising three member countries, Indonesia, Malaysia and Brunei Darussalam. The purpose of MABBIM is to develop each language and unify common terms in the three member countries, whose languages are all derived from Malay. MABBIM has also promoted Malay as the official language of ASEAN since 2005.

At the time it was established, Indonesia took the initiative in moving forward to smoothly achieve the organization's goals. However, we have seen some changes in its activities over the past few years. In this study, we analyze the phenomena that have caused such changes.

## はじめに

インドネシア語は東南アジア島嶼部のリンガフランカであったムラユ語（マレー語）を起源とし第二次世界大戦後インドネシアの国語となったものである。これに改良を重ね近代語のレベルにまで到達し、もはやムラユ語ではなく、インドネシア語という独自の言語となり、インドネシア共和国の不動の国語となった。そして今や国際語として世界に発信を始めている。ムラユ語はマレーシア、ブルネイ・ダルサラム、シンガポールの国語となっており、その他タイ南部、フィリピン南部および東ティモールでも話されている。ムラユ語を起源とする言語の話者数は3億程に達する。これは東南アジア諸国の総人口の約半数となる。

ムラユ語を起源とする言語を国語としている国であるインドネシア、マレーシア、ブルネイ・ダルサラムが各国の国語整備、用語の統一を目的に3国の言語分野協力機関である MABBIM<sup>i</sup>という機関を設立し、現在はシンガポールもオーディエンスとして加わり 1972 年以来活動を続けている。この中で 2005 年よりムラユ語を ASEAN の公用語とすべく活動が進められている。

MABBIM 設立当時はインドネシア主導型で目標に向かって順調に活動していたが、ここ数年組織の活動に変化が生じてきた。本稿では変化の原因となる問題点を追究する。

## I. インドネシア、マレーシア、ブルネイ・ダルサラム 3 国間の言語分野協力会議

インドネシア、マレーシア、ブルネイ・ダルサラム 3 国間の言語分野における協力機関であるブルネイ・ダルサラム、インドネシア、マレーシア言語審議会<sup>ii</sup>

---

<sup>i</sup> Majelis Bahasa Brunei Darussalam, Indonesia, Malaysiaの略語。ブルネイ・ダルサラム、インドネシア、マレーシア言語審議会。

<sup>ii</sup> 以降MABBIMと記す。

(MABBIM)は 1972 年にインドネシア、マレーシア言語審議会(MBIM)として発足し、1985 年にブルネイ・ダルサラムの参加により MABBIM となった。

2005 年度第 44 回会議までについては拙著<sup>iii</sup>に記してあるので本論では 2006 年度第 45 回会議以降の分析を行うが、その前に背景として下記事項を記す。

2004 年の専門家会議ではインドネシア語/マレー語を ASEAN の公用語とするために話し合い、協力していく必要があると決定された。

2005 年には「アセアン諸国の公用語としてのインドネシア語/マレー語」準備委員会が開かれた。本計画にはブルネイが積極的であり、「インドネシア語/マレー語がアセアンの主要言語となるためのメモランダム原稿」を準備した。その概要は以下の通りである<sup>iv</sup>。

考え方として、インドネシア語/マレー語を使用していない国への精神的配慮を行う。そのためには宗教色を避ける、各国の国家制度のセンシティブな部分に触れない、あくまで教育分野の教育制度でのインドネシア語/マレー語使用にフォーカスする、インドネシア語/マレー語の重要性についてのみ明確な考えを示す。しかし現時点で同意を得ることは難しく、アセアン会議の原稿や資料をインドネシア語/マレー語に翻訳し、会議中英語とインドネシア語/マレー語の相互通訳を行うことを提案する。

以上から当初の目標であったインドネシア語の綴りと用語の整備の他、インドネシア語をアセアンの公用語にすることが 2006 年以前に既に問題となっていたことが明確である。

---

<sup>iii</sup> 舟田京子、2006、『インドネシア・マレーシア両国独立後の言語協力に関する史的考察』早稲田大学アジア太平洋研究科

<sup>iv</sup> 2005 年「アセアン諸国の公用語としてのインドネシア語/マレー語」準備委員会議事録

## 1. 1. 第45回 MABBIM 会議

(2006年3月16日－18日、於ブルネイ・ダルサラム)

1. 「アセアンの公用語としてのインドネシア語/マレー語」の提案を宗教や国家制度のようなセンシティブな部分を避けて最新の内容にすることで承認した。
2. 2006年7月31日に3か国の教育相が共同コミュニケに調印をおこなう。
3. 用語辞書の編纂の指針をインドネシアが手掛けており、終了した。マレーシアがこれを確認し、追補中である。
4. インドネシアが「改定綴り指針」を出版し、マレーシアとブルネイ・ダルサラムが各国のフォーマットでこれを出版する。
5. 出版物は各国の言語に任せるが、できるだけ異なる単語より共通の単語を使用する。
6. MABBIM の成果による出版物は各国で自由に販売して良いが、非売品は3か国で交換する必要あり。
7. セミナーでは、グローバル化でインドネシアやマレーの文化は海外の影響を受けており、今後自国の言語と文化を問題とし考える必要があること、またマレー語圏以外の国での高等教育所でインドネシア語/マレー語教育を協力して推し進めることが話し合われた。

本来 MABBIM 設立当時は、同じ単語を使用するなど、3か国の国語をできるだけ統一しようとするのが目的であったが、2000年を過ぎることから次第に各国の使用単語を固持するようになり、5、6及び7のような表記が必要となった。設立当時はマレーシア、ブルネイ・ダルサラムは国語としてのマレー語が確立しておらず、インドネシア主導で少しずつ近代語として成立し始めた。国語として安定を始めると各国が自国独自のものを取り入れ始め、このような事態になったと考えられる。6. は MABBIM での成果を独自の用語に替え出版するように

なったが、非売品、つまり各国政府が出版するものに関しては逸脱のないよう 3 国で共有するべきという考え方である。

2006 年 7 月 31 日に 3 か国の教育相による共同コミュニケ調印が行われた。1972 年の 3 か国の教育相による共同コミュニケによって MABBIM の前身である MBIM が設立されたが、34 年の時を経てその内容が現状に合わなくなってきているために内容を刷新して 2 回目の共同コミュニケがインドネシア主導で出された。

## 1. 2. 第 46 回 MABBIM 会議（2007 年 3 月 15 日ー17 日、於マレーシア）

1. 第 20 回専門家会議で合意された用語辞典を各国のバージョンで出版することを承認。また内容確認のため、出版された辞典を 3 か国に配布することを承認した。

これも設立当初であれば共通の辞書として出版されるべきであったが、2005 年くらいから MABBIM での成果をもとに各国が自国バージョンのものを印刷するようになった。

2. 2006 年 7 月 31 日に 34 年ぶりに改訂された 3 か国教育相<sup>v</sup>による共同コミュニケが出された。

この共同コミュニケにより新しい形の協力関係が継続されることになった。

1 に付随して MABBIM 用語委員会の活動を記す。

MABBIM 用語委員会は 1975 年に設立され、現在は MABBIM の中の 4 委員会、つまり用語委員会、研究委員会、出版委員会、育成委員会の一つとして MABBIM の前身の MBIM 設立以来最も重要な委員会として継続されている。249 の項目からなる 30 分野の用語を新語や外来語を取り入れ作成している。*Pedoman Umum Pembentukan Istilah*（用語作成一般指針）（1975、1989、2004、2012）や *Panduan*

---

<sup>v</sup> インドネシアの Bambang Sudibyo 国民教育相、マレーシアの Sri Hishammuddin Tun Hussein 教育省、ブルネイ・ダルサラムの Seri Awang Abu Bakar Apong 国際関係相（文化、青年、スポーツ相代理）

*Penyusunan Kamus Bidang Ilmu* (専門用語辞典編纂指針) (1993)を出版している。今後は各国既存の単語がある用語については各国が個別に継続し、MABBIM としては検討せず、用語の最新化を地方語、メディア用語、文学用語などを取り入れつつ継続していく。各国で既存の単語があるため、MABBIM 作成用語での用語辞書の出版については上記 2 指針本に倣った内容のものの出版を各国に任せるという形をとらざるを得ない。以上から用語委員会を主導してきたインドネシアとしては、学術分野の専門家たちとの話し合いの結果、MABBIM での協力体制での用語の発展活動は継続するが、学術辞書の編纂は各国が別々に行うのが好ましいと提案した。

### 1. 3. 第 47 回 MABBIM 会議 (2008 年 4 月 9 日－11 日、於インドネシア)

1. 外国でのインドネシア語/マレー語センターの開設は東南アジア諸国内とする。また学士過程あるいは語学コースでのみとする。
2. 会員 3 か国、シンガポール以外の近隣国を MABBIM セミナーに招待することを承認し、マレーシアはタイを、ブルネイ・ダルサラムはフィリピンをインドネシアは東ティモールを招待することとなった。

結論としてはタイ国内が政情不安定なため、マレーシアはタイを招待せず、ブルネイ・ダルサラムはフィリピン大使館に招待状を送り、インドネシアは東ティモールの事前調査にとどまった。

同年の第 14 回事務局会議において研究報告書として “Perluasan Penggunaan Bahasa Indonesia/Melayu ke Luar Negara” (海外へのインドネシア語/マレー語使用拡大) が提出された。これは 2006 年の共同コミュニケに従い 3 国の提案をまとめたものである。共同コミュニケの 3 事項実現のため 2007 年 9 月の 3 国事務局(JKTBM, JKTBMBD 及び Pakersa)は 1. 海外へのインドネシア語/マレー語教員の派遣 (マレーシア)、2. 3 国で学ぶためインドネシア語/マレー語教員に奨学金を付与 (ブルネイ・ダルサラム)、3. 海外にインドネシア語/マレー語での研究センターの開

設（インドネシア）の提案をするよう決定された。目的は国際的にインドネシア語/マレー語使用度を拡大することで、そのためにインドネシア語/マレー語研究センターを開設し、教員を派遣することが提案された。また外国からのインドネシア語/マレー語研究者の受け入れも容易にできるように考慮された。研究センターでの活動としては 1. 大学レベルの教育、2. 言語能力コース、訓練、3. 言語学習の容易さのアピール、4. 言語と文化振興が挙げられた。まず現在築いている関係で教員を派遣することが研究所開設の第 1 歩である。戦略としては各国大使館の支援を受けること、既存のセンターなどの機関の範囲を拡張する、インドネシア語/マレー語で利益をもたらす国に優先して研究所を開設することであり、そのためには海外の大学や諸機関と協力関係を結ぶ必要があるということが確認された。

翌 2009 年には 3 国が個別で行動をとっている。つまりインドネシアはアラブ諸国、中国、東ティモールへ教員を派遣し、ベトナムと MOU を結んでいる。マレーシアはタイのソクラー女王大学、タマサット大学でマレー語のプログラムを、北京大学へは教員を派遣した。ブルネイはタマサット大学で授業を行っている。結局 3 国共通のプロジェクトとはならず、個別のプログラムとなった。

#### 1. 4. 第 48 回 MABBIM 会議

（2009 年 3 月 26 日ー28 日、於ブルネイ・ダルサラム）

1. 2008 年に MABBIM メンバー国拡大の第 1 段階としてインドネシアが東ティモールを、ブルネイ・ダルサラムがフィリピンを招待。マレーシアはタイを招待する予定であったが、タイの国内が政情不安定のため実現せず。
2. セミナーではマレーシアは 21 世紀の国家教育制度でマレー語は各学生が習得しなければならない科目であると明言した。また各言語はそれぞれの役割を持っているので、英語はインドネシア語/マレー語と競合するべきものではないと結論づけた。インドネシア語/マレー語が一般社会人に興味



を持たれるように書籍、雑誌、論文、ウェブサイト、映画、演劇などでのインドネシア語/マレー語の質を向上させなければならないとし、学術書ではインドネシア語/マレー語の尊厳を高めるため自国語で書き、翻訳をする必要があるとされた。

3. 用語委員会では辞書編纂や単語集作成は各国で自由に行い、必要のある場合は適宜話し合いを行い、完成した辞書や単語集は相互交換を行うことを決定した。

#### 1. 5. 第49回 MABBIM 会議（2010年3月7日－12日、於マレーシア）

海外へのインドネシア語/マレー語使用拡大提案について、下記事項が実施された。

1. マレーシアはタイのソククラ女王大学、タマサット大学でマレー語使用向上プログラムを実施した。中国の北京外国語大学、Guangxi 国民大学へ教員を派遣した。
2. インドネシアはエジプトの Ain Sham 大学、中国の Guangdong 大学、Guangzhou 大学、東ティモールでインドネシア語の授業を行い、ベトナムと MOU を結んだ。
3. ブルネイ・ダルサラムはタイのタマサット大学でマレー語の授業を行った。
4. インドネシアは Pusat Bahasa から Badan Bahasa へ格上げするため政府規約を定め 2008 年に言語法を定めた<sup>vi</sup>。2009 年の「国旗、国語、国の象徴、国歌」に関するインドネシア語法第 24 号でインドネシア語を国の象徴と定めた。
5. 審議会は国の象徴としてのインドネシア語/マレー語の地位を守るためには強い政治力が必要であることを確認した。

---

<sup>vi</sup> これにより Badan Bahasa（言語振興育成局）は言語（インドネシア語、地方語）に関する全権を与えられた。

6. 各国間の用語で 20%以上の違いが出た場合には専門家が話し合いを行う。
7. 外国人対象のマレー語/インドネシア語用教材は各国が個別に作成したものを使用して良い。

#### 1. 6. 第 50 回 MABBIM 会議 (2011 年 3 月 24 日ー25 日、於インドネシア)

1. 学術分野の辞書編纂を各国が個別に行うことを承認する。
2. 決められた条件に従えば、他の参加国が発行した学術辞書を各国の言語に合わせ出版する許可を与えることを承認する。

#### 1. 7. 第 51 回 MABBIM 会議

(2012 年 4 月 6 日ー7 日、於ブルネイ・ダルサラム)

1. セミナーの中で学術語としてインドネシア語/マレー語を新しいメディアやデジタル分野も含め高めていかねばならないという意見が出された。
2. 「言語週間」は各国で開催するが、他の会員国を招待する必要があることが承認された。

2011 年以降各国用語委員会 (Komisi Peristilahan)は集合し話し合いを行うことがなくなり、それぞれの成果の交換もなくなった。事務局会議の許可がある時のみ集合する。辞書は各国で自由に作成し、バージョンを変えて出版することが許可された。2010 年が各国の委員が集合し、結果を交換した最後の年となった。<sup>vii</sup>

#### 1. 8. 第 52 回 MABBIM 会議 (2013 年 4 月 5 日ー7 日、於マレーシア)

1. 出版委員会は言葉の使い方について、各国の言葉の使い方と語体を使用し  
て良いと明記した。

これは各国で出版に関して言語の統一をすることを断念したことを意味する。

---

<sup>vii</sup> Badan Bahasa職員インタビュー

# **1. 9. 第 53 回 MABBIM 会議（2014 年 6 月 6 日－7 日、於インドネシア）**

1. 各国で編集した学術分野の辞書や用語集について、MABBIM の用語委員会のアドバイスが必要な時以外用語委員会は干渉せず、各国個別の編纂が認められる。しかし各国の用語委員会は他の参加国に発展状況を報告する必要がある。
2. セミナー（「教育界での MABBIM 用語の社会化」）中次のような意見が出された。  
①用語使用の低下を克服するためインドネシア語/マレー語の用語使用頻度を高める。  
②用語使用のための教員教育を行う必要がある。  
③国民のために教育の中で用語の標準化を促進する手段として語彙集（グロサリーム）を作成する必要がある。  
④言語機関で特に教育分野において MABBIM 作成用語を国民が使用するよう戦略的政策を立てる必要がある。  
⑦用語は伝えるのが困難な場合、各国の都合に合わせて良い。

⑦は既に各国個別の用語を使用することが認められていることを示している。

# **1. 10. 第 54 回 MABBIM 会議**

（2015 年 4 月 8 日－9 日、於ブルネイ・ダルサラム）

タイからの代表団 2 名が会議に参加。

1. セミナー（「科学、技術、芸術分野の牽引及び手段としてのマレー語/インドネシア語の役割を強固にする」）の中で、国内外にインドネシア語/マレー語の研究センターを設立する必要がある、インドネシア語/マレー語の専門家を集める、あらゆる分野の翻訳本を増やす必要がある、などの意見が出された。
2. 研究委員会ではインドネシアは医学、薬学用語を、マレーシアは情報技術用語を、ブルネイ・ダルサラムは経済用語の成果を報告後、各国で自由に出版を行うことを承認した。

会議の中でインドネシアから MABBIM の合法性と活動の保証強化のため「MABBIM の協力に関する提案」として以下の提案がなされた。

MABBIM（当初は MBIM）設立より 57 年が経過し、3 か国は語源、文化の同類性や各国国語の確立を望むという共通性から協力して活動を続け、多くの成果を生み出した一方、多くの分野で相違や変更が生じてきた。そこでインドネシア MABBIM は共同コミュニケに基づき、3 か国の参加国の一致団結した再協力関係を提案した。その目的は 1. 3 か国間の義務/確約を強靱なものにする、2. MABBIM の存在を強固なものとする、3. 計画済みの活動を鋭尖なものにする、の 3 点である。これは参加国間のより円滑な共通認識のためである。本提案に関する話し合いは次回の事務局会議で行われ、会議で正式承認される。

上記協力関係の確認、再強化に関する提案は当初の協力関係が崩れ、各国が自由に活動を始めたことを危惧し、MABBIM の役割を再認識するために提案されたものと考えられる。

#### 1. 11. 第 55 回 MABBIM 会議（2016 年 4 月 8 日ー9 日、於マレーシア）

1. 2016 年のセミナー（「国民のイメージとしての地方の能力の活用」）の中で、各地方の名前など土地本来のものは維持しなければならない、各地方の文化価値も人材の質を高める産物として取り上げる必要がある、各地の知恵も国家レベルで協力し計画的に発掘しなければならない、各地の知恵の産物は出版するなど保存や普及をする必要がある、古いものは民族のアイデンティティとして使用するよう提唱するなどの意見が出された。

以上からもインドネシア主導の下での 3 か国の本来の協力体制が崩れ、各国が個別に活動を始めたことが明確になった。

## Ⅱ. MABBIM の成果の辞書、語彙集

MBIM(1972—1983)での3か国による単語の成果は66,460語で、MABBIM(1984—2005)での21年間では科学分野(19,528語)、物理学分野(14,676語)、数学分野(19,998語)、生物学(22,358語)、医学分野(31,298語)、薬学分野(5,141語)、経済学分野(5,786語)、言語学分野(2,094語)、哲学分野(209語)、文学分野(5,070語)、林業分野(5,343語)、農業分野(8,313語)、金融分野(10,249語)、マスコミュニケーション(8,239語)、社会学分野(3,382語)、電気技術(1,100語)、機械技術(1,986語)、科学技術(2,727語)、鉱山技術(1,448語)、土木工学技術(1,194語)、人類学分野(2,681語)、漁業分野(5,750語)、獣医分野(6,501語)、畜産分野(4,468語)、情報技術分野(15,694語)、考古学分野(2,835語)、自動車技術分野(2,191語)、航空機技術分野(4,013語)、宇宙技術分野(2,283語)、写真分野(4,061語)、政治分野(9,059語)、歯科医学分野(10,708語)、教育分野(8,005語)、イスラム教分野(5,908語)、看護分野(2,468語)、観光分野(6,815語)、ゴルフ(448語)の37分野での計263,280語である。(Dedi Puryadi, 2006)

ちなみに MBIM/MABBIM 設立以前インドネシアの国語整備機関(現在の言語振興育成局の前身)で作成した用語数は1938—1949で8,633語、1950—1966は321,719語である。<sup>viii</sup>

MABBIM の活動成果で出版された学術辞書は農業(1981)、化学(分析化学)(1981)、経済学(1984)、水文地質学(1984)、鉱山技術(1985)、政治(1985)、商業経営管理(1985)、観光(1985)、畜産(1985)、動物学(1985)、人類学(1985)、新聞学(1985)、人口統計学(1985)、気象学(1985、1994)、養殖(1985、1994)、生物学(学生用生物学)(1985)、生物学(生物解剖学、生物分類学)(1987)、水文学(1987)、物理学(力学)(1987)、物理学(量子力学)

---

<sup>viii</sup> Dedi Puryadi, 2006.

(1987)、物理学(電磁気学) (1988)、化学(一般化学) (1988)、化学(有機化学、地球化学) (1989)、化学(無機、地球化学) (1989)、天然資源保護(1989)、生物学(生理学) (1990)、生物学(微生物学) (1992)、化学(農業化学) (1992)、数学(基礎数学) (1993)、地理学、地質学(1993)、医学(産科学、婦人科学) (1993)、化学(食品化学) (1993)、化学(応用、環境、工業) (1993)、化学(物理化学) (1993)、生物学(バイオテクノロジー) (1993)、生物学(植物病理学) (1993)、生物学(繁殖、遺伝学、進化) (1993)、物理学(音響学、視覚学) (1993)、物理学(原子) (1993)、物理学(輻射能、熱力学) (1993)、物理学(近代物理学) (1993)、物理学(繊維、レーザー視覚学) (1993)、水文気象学(1993)、金融(金融) (1993)、物理学(特別相対性理論)、(1994)、物理学(固体物) (1994)、化学(法医学、免疫化学) (1994)、化学(核化学、放射化学) (1994)、数学(解析 I) (1994)、数学(幾何学) (1994)、数学(実施リサーチ) (1994)、数学(統計学) (1994)、生物学(合同) (1995)、物理学(統計資料力学) (1995)、物理学(合同) (1995)、金融(会計) (1995)、金融(保険) (1995)、化学(有機化学) (1995)、化学(パルプ、製紙) (1995)、化学(合同) (1995)、数学(代数) (1995)、数学(合同) (1995)、風土学(1996)、物理学(電子学ー光電子工学) (1996)、生物学(細胞学) (1996) の 65 分野、67 冊である。(Dedi Puryadi,2006)

上記より 1993 年、1994 年、1995 年の出版活動が盛んであったことがわかる。しかし 1996 年の風土学、物理学(光電子工学)、生物学(細胞学)の辞書を最後に MABBIM で成果を得た用語による辞書は出版されていない。というのはインドネシアでは十分な予算がなく、また独自の出版局を持っていないため、辞書としては 1000 部のみ出版となり、市場には出回らず、言語振興育成局内、および図書館のみの所蔵となり、社会には普及できていない。そこで辞書あるいはグロスariumとならずに医学、科学技術、マスコミュニケーション、鉱山技術、写真、

映画、歯科医学、イスラム教、教育、哲学、土木工学技術など未だ原稿のままとなっているものもある。非常に残念な現実である。

しかし一部グロサリウムとして民間の出版社と協力し普及させているものもある。言語振興育成局出版のものは無料であるが、出版社が出版するものは市場で販売のため有料となる。その出版社は Balai Pustaka であり、化学用語辞典、物理学用語辞典、生物学用語辞典、数学用語辞典(1999)、インドネシア語大辞典、インドネシア語一般辞典、文学用語辞典、物理学グロサリウム、化学グロサリウム、生物学グロサリウム(言語振興育成局出版のものより内容充実)、パンチャ・シラグロサリウム、数学グロサリウムがあげられる。<sup>ix</sup>

一方マレーシアは MBIM/MABBIM での成果を国立言語図書研究所(DBP)自身の出版局で出版し、社会に普及させる。特に教科書の中に採用するなど、教育面で社会に普及させている。<sup>x</sup>

### Ⅲ. 近年 MABBIM 内で生じている諸問題

1972 年の MBIM 設立当初は綴り、用語、文法を統一し、各国の国語をより近く、かつ近代語として発展、保護させていくという方針のもとにインドネシアを中心として活動を進めてきた。綴りに関しては 1959 年からスペールの協力関係は始まっており、マレーシア対決後 1966 年から共同作成が始まった。その結果 1967 年にはムリンド綴り(Ejaan Melindo)<sup>xi</sup>が出され、最終的に 1972 年に完全インドネシア語綴りが正式に発表されている。マレーシアはこれに従い、綴りの統一はなされた。そして 1975 年から活動の中心は用語に移っていった。

1972 年の MBIM、1985 年の MABBIM 設立以来各国の経済状況などの変化により、言語として最も発展しているインドネシア語を土台に各国語を発展させてい

---

<sup>ix</sup> 言語振興育成局職員インタビュー、2017年2月

<sup>x</sup> Dedi Puryadi, 2006

<sup>xi</sup> Ejaan Melayu Indonesiaの省略形

く体制が崩れてきた。それは第 1 章の言語分野会議で記されているように 2000 年以降次第に明らかになり、2010 年頃には如実になってきた。実際に当時 MABBIM 担当であった関係者のインタビューをもとに問題点を分析する。

MABBIM 自体に辞書を出版する予算はないので、MABBIM の名前で辞書を出版することはできない。そこで 2003 年に MABBIM 3 か国の成果としてブルネイ・ダルサラムの国立言語図書研究所(Dewan Bahasa dan Pustaka<sup>xii</sup>)が群島辞典(Kamus Nusantara<sup>xiii</sup>)を出版した。内容をみるとほとんどがインドネシア語大辞典(KBBI)からの写しである。これはインドネシア語辞書と言ってもよく決して 3 か国が協力して作成した辞書ではない。この時期からインドネシアは MABBIM でのインドネシアの成果を他 2 か国がそのまま利用していると感じるようになった。<sup>xiv</sup>

MABBIM の活動は言語育成が中心となり、綴りは統一したが、用語は別々に作成するようになった。

2006 年の事務局会議で共同コミュニケに従い、専門家会議 (Sidang Pakar) を学術振興専門家会議 (Sidang Pakar Pengembangan Ilmu) に変更する案が出され、翌年 2007 年に変更された。インドネシアは 2007 年に用語を分野別から一つにまとめ専門用語一覧表 (Glosarium) にした。しかし 41 分野から成るインドネシアの専門用語集 (Glosarium Bidang Ilmu) 1～6 巻は現在まで辞書にはなっていない。これに倣い各国が別の単語集 (senarai) を作成することになった。これを機にインドネシアから各国個別に作成可能で、結果報告という形にしようと提言を行った。これに伴い 2009～2010 年頃より別々の単語を使うようになり、報告のみとなっていた。

それまでは専門家会議は用語委員会 (Komisi Istilah) のみであったが、学術振興専門家会議は 2009 年に 1. 用語委員会 (Komisi Istilah)、2. 研究委員会 (Komisi

---

<sup>xii</sup> ブルネイ・ダルサラムで国語関連の振興、育成を一手に担っている文部省下にある機関で、ブルネイ・ダルサラム代表 MABBIM メンバー機関

<sup>xiii</sup> 広くインドネシア、マレーシア、ブルネイなどマレー語圏地域を意味する。

<sup>xiv</sup> 言語振興育成局職員インタビュー



Penelitian)、3. 出版委員会 (Komisi Penerbitan)、4. 育成委員会 (Komisi Pembinaan)<sup>xv</sup> の4つの委員会に分かれた。これは2010年の事務局会議で承認された。用語委員会 (Komisi istilah) では当初言語共同委員会 (Panitia Kerjasama Kebahasaan) で共同で活動しており、指導方針はあったが、少しずつ異なっている。例えば英語の -ty はインドネシアでは -tas (universitas) であるが、マレーシアでは -ti (universiti) となっている。出版委員会 (Komisi Penerbitan)、研究委員会 (Komisi Penelitian)、そして育成委員会 (Komisi Pembinaan) は各国が協力関係にある。

以上から用語委員会だけが MABBIM の本来の主旨とは異なり、各国が個別に活動し、自国の用語を作るようになった。そして結果を MABBIM に報告するのみとなった。2014年からMABBIMの用語委員会の集まりがなくなり、3国で用語に関する検討会は行われなくなったが、コンピューター用語など新語については必要とみなされ時は3国で集まることもある。<sup>xvi</sup>

現在のMABBIMの目標の一つとなっているインドネシア語/マレー語の国際語化について、3か国の中で温度差が生じている。

2012年に当時の言語振興育成局の局長がインドネシア語とマレー語は異なる言語であると発言。これに対し、マレーシアは、インドネシア、マレーシア、ブルネイ・ダルサラムは大マレー文化 (Budaya Melayu Raya) として共通であり、言語は文化の中のものであるから、インドネシア語とマレー語は同じであり、あくまでもインドネシア語はマレー語の一部であると強調した。2013年には当時の局長が Tanjung Pinang の会議で「インドネシアのマレー語」(Bahasa Melayu Indonesia) という表記は遺憾であると発言した。これはマレーシアおよびブルネイ・ダルサラムが「マレーシアのマレー語」、「ブルネイ・ダルサラムのマレー語」と表記し、インドネシア語でなく、「インドネシアのマレー語」と表記することがある

<sup>xv</sup> 育成委員会ではインドネシアは辞書編纂人の養成をし辞書編纂担当、マレーシアは翻訳作業担当、ブルネイはMABBIM講座担当

<sup>xvi</sup> Badan Bahasa職員インタビュー、2016年10月

からであった。2014 年にマレー語審議会 (MABBAM)<sup>xvii</sup>がマレー語を国際語にすべく当時のインドネシアの局長を招待したが局長はこれを拒否した。2015 年にはバンテンにおけるマレー語会議 (Kongres Bahasa Melayu) でインドネシア語とマレー語は異なることを強調した。2015 年言語振興育成局主催の言語政策セミナー (Seminar Politik Bahasa) でマレーシアは当時の言語振興育成局局長が「Indonesia」と発言したところをすべて「Melayu」に入れ替え新聞で報道した。マレーシアはマレー語をアセアン経済共同体の公用語にしようと提言。インドネシア側はインドネシア語はマレー語ではないからとこれを拒否した。インドネシア語とマレー語では使用している単語も異なる部分が多く、ひとつにまとめて国際語にするのは無理と判断したためである。<sup>xviii</sup>

これは 1998 年に発案されて以来、MABBIM では語源がマレー語である国が協力してマレー語として ASEAN の公用語にしようとする運動が起き、各国が第 2 章にあるように、努力を続けていることに関連する。しかしながらこの数年インドネシア側はインドネシア語はマレー語を整備し近代語にしたものであり、既にマレー語ではないので、マレー語として ASEAN の公用語とするのは賛成できないとする意見を出している。マレーシアは自国を中心として ASEAN の公用語としてマレー語を承認させ実権を握る意欲を見せている。マレーシアがホスト国である 2014 年にシンガポールが MASTERA<sup>xix</sup>に加入した。<sup>xx</sup>自国がホスト国である時に新しい国や人が参加すると、自国のネームバリューが上がるためのマレーシアのスタンドプレーとインドネシア側は考えている。

2006 年、当時のインドネシアの言語振興育成局所長は 3 国の教育相による共同コミュニケでマレー語/インドネシア語を国際語にすることへの協力を記したの

---

<sup>xvii</sup> マレーシアが主催する言語審議会

<sup>xviii</sup> 言語振興育成局職員インタビュー、2016年9月

<sup>xix</sup> インドネシア、マレーシア、ブルネイ共同の文学審議会

<sup>xx</sup> シンガポールはインドネシア、マレーシア、ブルネイ・ダルサラム3によるMABBIM (言語審議会) の会員にはならず、MASTERA (文学審議会) に入会している。これはシンガポール政府がマレー文学審議会への入会は許可しても、国の核となる国語に関する言語審議会への参加を許可しないためである。

で、各国がそれに向け活動を行ってきたが、ここ数年インドネシア語とマレー語の違いが如実になり、どちらを国際語とするかで意見の相違が出てきている。インドネシアとしてはマレー語として国際語になった場合、インドネシア語にならない出来上がってきたマレー語が国際語になるのは許されない。言語の熟成度、話者数、普及範囲などからみると明らかにインドネシア語を ASEAN の公用語にするべきであると考えられる。しかし政治、経済、技術面が強くなしないと ASEAN 語にはなりえない。

以上から MABBIM の中での活動で、マレーシアはインドネシアを模倣し、ブルネイ・ダルサラームはマレーシアと協力関係にあり、マレーシアに従属しているという状況からもインドネシアは MABBIM から離れたいというのが本音である。

#### IV. まとめ

本来の現在の MABBIM の 2 大課題は各国国語の発展およびインドネシア語/マレー語を MEA, ASEAN の公式語とすることである。

1 つ目の各国国語の発展について、現在まで MABBIM では 40 万語以上の用語を作成している。MABBIM の成果として、用語表、グロサリウム、学術分野の辞書、インドネシア語/綴り一般指導書、用語形成一般指導書、学術分野辞書編纂指導書、セミナー論文集、MABBIM ジャーナルが挙げられる。<sup>xxi</sup>

このうち 3 指導書はインドネシアが作成し、他の国はこれを自国のバリエーションに直し出版している。用語表、グロサリウム、辞書は途中から各国独自で編纂をはじめ、論文集、ジャーナルは 3 国協力して作成されている。

MABBIM 参加各国が MABBIM にとらわれず、上記以外にも CD、ホームページなどの形で独自に発展させている。<sup>xxii</sup>つまり MABBIM の当初の方針とは異なり、各国が個別に用語作成を行い辞書などを出版している。これは 2 章からも

---

<sup>xxi</sup> Sekilas MABBIM

<sup>xxii</sup> Sidang Komisi Istilah, 2016

明らかである。用語の綴り、意味などは一部異なっているが、基本的なところはインドネシア語を踏襲している。インドネシア側からみると、マレー語と称してインドネシア語のそれを模倣し、マレー語の優越性を IT を使用し世界に向け主張していることが心穏やかでない。2016 年の事務局会議にシンガポールの南洋技術大学の専門家を招待し、Wordnet Bahasa についての説明を受けた。<sup>xxiii</sup>その結果インドネシアの MABBIM はインドネシア語の普及のため KBBI の情報を無料で Wordnet Bahasa に提供したが、マレーシアとブルネイ・ダルサラムの担当者は拒否している。このインドネシアの行動は 2015 年にインドネシアの MABBIM 委員会が MABBIM に提出した協力提案書 (Proposal Kerja Sama) に準じた行動であり、インドネシア側はこの協力提案書により各国の自由な行動を牽制できるのではないかと言う期待を持っているのではないかと考えられる。

MBIM/MABBIM 設立当初は綴り、用語を主として進めていく目的であったが、2009 年以降現在研究活動、出版、育成にも力を入れている。用語分野では問題が生じているが、出版、育成の部分では互いの探り合いなどなく現在は問題なく活動している。

各国の考える場として MABBIM を置き、それをもとに考え、各国が国語を発展させていくという形に変わっていくのも良いのかもしれない。

2 つ目のインドネシア語/マレー語を MEA, ASEAN の公用語とすることであるが、これは 1998 年にブルネイ・ダルサラムから「アセアン公用語としてのマレー語の可能性に関する MABBIM 構想」として最初に提案された。その後 2005 年を目標に 3 カ国が努力を重ねたが、マレー語を使用しない東南アジア諸国への配慮から達成はなされなかった。その後も 2006 年の共同コミュニケに従い、2008 年には「インドネシア語/マレー語の海外での使用拡大」を 3 カ国で提案し、マレー語を国際語とするべく、海外にマレー語研究センターを開設、海外の教育機関に

---

<sup>xxiii</sup> Musyawarah Sekretariat ke-22, 2016

教員を派遣し、マレー語/インドネシア語を教授するなどの努力を行ってきた。1998 年の MABBIM 構想の中では「マレー語」と記されているが、2008 年には「インドネシア語/マレー語」となっている。これが現在の問題で、インドネシアはマレー種族、ジャワ種族、スンダ種族、ミナンカバウ種族など複数のエスニックグループからなっているので、マレー種族の言語であるマレー語は国語ではなく、すべての種族に共通のマレー語を整備して出来たインドネシア語が国語であると主張している。ゆえに国語はマレー語ではないという前提があり、MEA, ASEAN の公用語とするのはインドネシア語なのか、あるいはマレー語なのかで両国譲らず、解決策がない。言語そのものを考えればインドネシア語が優位であるが、技術面、経済面からみるとマレー語が優位に立つ。マレーシアはマレーシア主導でマレー語という名前で MEA, ASEAN の公用語にするべく努力をしているが、インドネシアとしてはインドネシア語はマレー語より整備されており、話者数も 10 倍近くのインドネシア語をマレー語に含められ公用語となることを拒否している。マレー語圏の力を強化し、国際語とするためには必要なことであるが両者を一つにまとめることは難しい。言語は政治である。

## 参考文献

- Badan Pembangunan dan Pembinaan Bahasa, *Pedoman Umum Pembentukan Istilah*, Badan Pembangunan dan Pembinaan Bahasa, Jakarta: Kementerian Pendidikan & Kebudayaan, 2012.
- , *Panduan Mesywarah Sekretariat ke-22 MABBIM*, Badan Pembangunan dan Pembinaan Bahasa, Jakarta: Kementerian Pendidikan & Kebudayaan, 2016.
- , *Panduan Sidang Komisi Istilah I*, Jakarta: Pusat Pengembangan dan Pelindungan, Badan Pembangunan dan Pembinaan Bahasa, Jakarta: Kementerian Pendidikan & Kebudayaan, 2016.
- Dedi Puryadi, *Perkembangan Peristilahan dalam Bahasa Indonesia: Sejarah, Hasil dan Pemasyarakatan*, Jakarta: Universitas Negeri Jakarta, 2006.
- Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, *Panduan Penyusunan Kamus Bidang Ilmu*, Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, 1993.
- Dewan Bahasa dan Pustaka Brunei, *Laporan Sidang ke-16 Pakar MABBIM*, Brunei Darussalam: Dewan Bahasa dan Pustaka Brunei, 2002.
- , *Keputusan Umum Sidang ke-45 MABBIM*, Brunei Darussalam: Dewan Bahasa dan Pustaka Brunei, 2006.
- Funada Kyoko, 『インドネシア、マレーシア両国独立後の言語協力に関する史的考察』、東京：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科、2006.
- Jérôme Samuel, *Kasus Ajaib Bahasa Indonesia ? Pemodernan Kosa Kata dan Politik Peristilahan*, Jakarta: Pusat Bahasa, Forum Jakarta-Paris, 2006.
- Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan, *Peraturan Menteri Pendidikan dan Kebudayaan Republik Indonesia No.25 Tahun 2014*, Jakarta: Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan, 2014.
- Panitia Kerja Sama Kebahasaan, Pusat Bahasa, *Sekilas MABBIM*, Departemen Pendidikan Nasional, 2008.

神田外語大学紀要第30号

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 30 (2018)

Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan Nasional, *Pedoman Umum Pembentukan Istilah, Pusat Pembinaan Dan Pengembangan Bahasa*, Jakarta: Departemen Pendidikan Nasional, 2000

MABBIM (ブルネイダルサラム・インドネシア・マレーシア言語審議会) 事務局  
議事録 (2006－2016)

専門家会議報告書 (2001－2016)

執行部会議報告書 (2006－2016)

MABBIM 一般決定 (1991－2016)